

文化振興ビジョンを推進するための懇話会 第3回会議概要

- 1 日 時：平成26年10月9日（木） 14：00～16：10
- 2 場 所：松永記念館 老櫓荘
- 3 出席者
 - (1) 委員（8名）
水田座長、鬼木副座長、小川委員（途中参加）、神馬委員、露木委員、深野委員、杉崎委員（途中参加）、間瀬委員
 - (2) 行政（9名）
諸星文化部長、安藤文化部副部長、中津川文化政策課長、山口歴史的建造物担当課長、砂川専門監、諏訪部文化政策係長、高瀬芸術文化創造係長、酒井主査、大木主査
- 4 傍聴者 0名
- 5 会議の概要
 - (1) 第2回会議の振り返り
第2回会議の振り返りとして、事務局から説明。
 - (2) 文化振興ビジョン「施策の方針と取り組み」について
資料2～5に基づき、事務局から説明。

【鬼木氏】

- ・今回ご紹介いただいた「大阪府立江之子島文化芸術創造センター enoco」や小田原市の事例は、いずれも示唆に富んだものである。「enoco」では、補助金の支援を行っているのか。

【事務局】

- ・行っていない。

【鬼木氏】

- ・29年度に開館する芸術文化創造センターの創造スタッフ室をめぐる管理運営専門分科会での議論も踏み込んだ内容になっている。
- ・創造スタッフ室には、どのようなスタッフを配置するのか。専門のスタッフか。

【間瀬氏】

- ・まだ、詳細は決まっていないが、専門のスタッフは配置できないと思う。社会教育に

長けた人がいるのがベストであるが、おそらく、声がかかれば事業の担当者や技術スタッフが行くような形になる。

【鬼木氏】

- ・創造スタッフ室を生きたものにするのは、専門スタッフの力が大きい。

【深野氏】

- ・「enoco」で行っているプラットフォーム形成支援事業を見ると、行政上の課題を解決することを目的としているようで、文化芸術の振興に関するものとは違うような気がする。
- ・ただ、写真を見ると女性や若い人が多く写っている。そのような人たちが集まる場が作れているのは事実である。

【間瀬氏】

- ・アートやデザイン等をツールとして、解決策を検討させるのはすばらしい。

【文化部長】

- ・「enoco」の例は、ケーススタディとして文化の視点を持った行政の施策のプラットフォームである。
- ・このようなプラットフォームで、芸術文化創造センターとまちが市民参加や回遊性から密接に関わることができるのではないかと思う。
- ・これまで、市民会館は貸館だったが、事業運営、施設運営にも市民参加の視点や、まちへ出て行くことが必要である。

【露木氏】

- ・創造スタッフ室は、市が運営するのか。ほかの団体が運営するのか。

【文化政策課長】

- ・市が部屋を用意した。運営については、我々の中でもまだ固まっていない。直営になるか、ほかの団体になるか決まっていらないが、人員を出せないことだけはわかっている。

【露木氏】

- ・芸術文化創造センターを管理するのは団体か。

【文化政策課長】

- ・直営だった場合、事務くらいは職員でもできるが、舞台等になると専門でないといけない。

【露木氏】

- ・相談に乗ってくれる人がいるのは必須である。また、企画を考えられる人も必要。お互いの相乗効果を考えられるような人材が必要である。

【神馬氏】

- ・誰が、どう運営するのが重要である。指定管理者を選定するにもできるところを選ばないといけない。

- ・市民のやりたいことを支援できるコーディネーターが必要。
- ・縦割りでなく、アートを通じて、福祉などの問題を解決できると良い。

【深野氏】

- ・創造スタッフ室は、オープンで、入りやすくなければいけない。壁がないほうが良い。部室のイメージではだめである。

【文化部長】

- ・特定の人が占有することのないようにしなければならない。大人の節度をわきまえたところで、活動がしやすく、使いやすいことが必要である。

【水田氏】

- ・創造スタッフ室は、登録制とあるが。

【事務局】

- ・団体として登録して、使用していただく予定である。

【杉崎氏】

- ・市民ワーキングに参加したが、関係のない人は入ってきてほしくないという意見が出ていた。

【間瀬氏】

- ・この辺は、難しい問題である。

【文化政策課長】

- ・平成 27 年度にオープン予定の(仮称)市民活動交流センターの市民活動スペースは、壁のないオープンスペースとなっている。

【杉崎氏】

- ・芸術文化創造センターと(仮称)市民活動交流センターで同様の動きをしているので区分けをしてもらいたい。

【小川氏】

- ・創造スタッフ室がうまく機能するためには、設置場所と開館時間が重要である。
- ・使う側からすると、コピー機がある、文房具があるといったような使い方に夢があるほうがよい。
- ・創造スタッフ室の人材は難しい。誰でも話ができる人、愚痴を聞けて、相談窓口になげられる人がふさわしい。
- ・ワークショッブルームは、これから大事になるので、理念を持った空地であってほしい。

【杉崎氏】

- ・愚痴を聞くことは大事。センターのイメージにつながる。

【水田氏】

- ・スタッフは兼務という話があったが。

【間瀬氏】

- ・職員の確保ができれば、ローテーションで一人を貼り付けることはできるが、実際は、声がかかったら、その専門のスタッフが行くようになると思う。

【深野氏】

- ・「愚痴」が引っ掛かる。愚痴はそもそも解決策を導き出せないことが多いから愚痴になる。創造スタッフ室の人が愚痴を聞いたら、その問題に対する答えを出さなければいけないのではないか。

【杉崎氏】

- ・愚痴は、何かしてもらいたいということである。

【露木氏】

- ・現状に不満があるから愚痴になる。アイデアが出せる人が創造スタッフ室にいないといけない。

【深野氏】

- ・愚痴は、自分の論理で筋が通らないから言うものなので、愚痴の対象の人も筋があり、筋と筋とのぶつかり合いだから、簡単には解決しないだろう。

【文化部長】

- ・開館当初は、施設側からのアプローチが必要になるであろう。

【水田氏】

- ・お金の絡む支援制度についてはどうか。

【鬼木氏】

- ・創造スタッフ室は、芸術文化創造センターの施設であって、全市を網羅したものではないため、資料2の「芸術文化に関する支援」は、この部屋とは別の仕組みが必要となる。
- ・補助金制度も含めた総合的な支援制度を考える必要がある。支援制度を構築するためにも、外へ出て、小田原市内を歩き回る御用聞きのようなスタッフが必要なのではないか。
- ・制度設計にあたっては、市民の意見を反映しなければならない。
- ・「愚痴」という言い方があったが、本音を言い合えるネットワークと言い換えても良い。

【文化部長】

- ・支援制度の拠点が、芸術文化創造センターになると考えている。
- ・芸術文化創造センターの位置づけは、行政が考えなければならないものと、市民と行政で考えなければならないものがある。

【水田氏】

- ・創造スタッフ室以外で望む支援について議論していただきたい。
- ・資料2にある(3)「事務局機能の担当」とあるが、団体が望んでいることか。

【文化部長】

- ・新しい団体、既存の団体でも望んでいるものである。
- ・団体としての活動は活発だが、事務局機能をどうするかという悩みが多いと聞いている。団体の長が事務局を担うとなると、とても大変なことである。
- ・団体の一番の悩み事であるが、行政側としては、一番手を出しにくいところである。

【杉崎氏】

- ・規約も持っていない団体があり、補助金の申請もできない。団体の存続問題につながる。

【文化政策課長】

- ・団体は何かをやりたくて集まってくるものであり、事務局をやりたいからあつまる人はいない。そうすると、市の職員にやってもらえばという話になる。行政側としては、やって良いものか悩ましい。

【杉崎氏】

- ・中には、1年ごとに理事が変わる団体があり、事務が引き継がれないことがある。

【深野氏】

- ・市民活動の中で芸術文化というと、「資金」、「マンパワー」、「事務局」が問題となってくる。
- ・市の補助金がなければ続けられない団体が多いのではないか。
- ・支援する側は、支援する内容を提示し、補助金支援の意味と自助努力の必要性を受け取る側にきちんと理解してもらうことが必要である。
- ・文化とは、言ってみれば「遊び」である。遊びは、お金がかかるもの。そのため資金は貯まらないのが普通である。それを一体どうしていくのかを考えなければならないのだから、補助金を受け取る側にも、覚悟を持ってもらいたい。
- ・一年ぐらいで変わる団体にはお金を出す必要はない。

【杉崎氏】

- ・補助金をもらって始める団体が壊れていく。
- ・文化連盟の人たちは、お金がなくても活動を続けていく人たちである。
- ・補助金を毎年もらえるとイメージをなくすべきである。

【文化政策課長】

- ・昔からの古い団体と、新しい団体を整理しなければいけない。
- ・補助金、事務局の問題などあるが、団体は自立すべきである。

【鬼木氏】

- ・文化リポーターを創造スタッフ室の一部機能にするのに疑問がある。もっと独立したものが良い。

【神馬氏】

- ・各種養成講座を受けた人たちが、センターができた後に繋がるよう希望する。
- ・特に、小田原文化サポーターはNPO化を目指しているが、開館後に入り込めないと

なると士気が落ちてしまうが、どうしたらよいかわからない。

【深野氏】

- ・資料2の(5)「各種育成講座の開講」についてだが、講座を受けた後、本格的に活動する団体になるのであれば良いが。

【間瀬氏】

- ・そういうことができる市民になってもらえれば良い。卒業生がチームを作って活動していくのも良いが。

【深野氏】

- ・既存の団体の責任者に学んでほしい。

【鬼木氏】

- ・次回の懇話会では、支援制度全体のねらいや、支援制度（補助金以外も含む）の個々のメニューとそのねらい、対象、このような制度を市民が支え、市民がつくりあげるための仕組みについての議論とあわせて、このような制度の根拠となるビジョン、条例的なものについて議論したい。

以上で議題は終了し、次回の日程を確認して会議は終了した。

なお、第4回の会議は12月18日（木）に開催することとした。